

2020年4月12日（日）逗子教会 主日礼拝説教／復活祭

●聖書 エレミヤ書24：6～7

ヨハネによる福音書21：1～14

●説教 「あの日あの時あの場所で」

皆さん、イースターおめでとうございます。皆さんには、自宅での礼拝をお願いしておりますので、きょうの礼拝堂はガランとしております。このようなことは、今までなかったことです。

今年のイースターは、皆さんにとっても私にとっても一生忘れられないイースターとなることでしょう。何年経っても、「あの日、あの時、あの自宅で、あんなふうにしてイースターを守ったなあ」と記憶に残り、語り草になることでしょう。教会の歴史にも刻まれることでしょう。本日の説教題、「あの日あの時あの場所で」は、きょうの聖書箇所の内容から1ヶ月以上も前に決めた説教題であり、今日のような日が来ることを想定せずにつけたものでした。しかし、いみじくも別の意味で的中するようなことになってしまいました。

本日の復活祭礼拝から、逗子教会は共に集まっての礼拝を休止する決定をいたしました。もちろん、新型コロナウイルス感染拡大防止のためです。逗子教会は戦後に建った教会ですが、戦前からあった教会でも、戦争中でも礼拝は休止しなかったという教会が多くあります。そういう意味では、私たちが経験したことのない事態を迎えているわけです。しかし私たちは、どこにいても主であって一つ。みことばに耳を傾けてまいりたいと思います。

復活の主イエスの3度目の現れ

お気づきの方もおられると思いますが、本日の聖書箇所は、今年の復活祭礼拝の続きの箇所といたしました。それは、十字架で死んで墓に葬られたイエスさまが、よみがえられてから、弟子たちに現れなさった3度目のできごとについて書かれています。

場所はティベリアス湖畔であったと書かれています。ティベリアス湖というのはガリラヤ湖のことです。つまりそこは、イエスさまの弟子たちのうちの多くの出身地付近ということになります。

彼らはなぜガリラヤにいらんでしょうか？ イエスさまが十字架につけられたのはエルサレムの都でした。そして復活されたイエスさまが最初に、そして2度目にその姿を見せられたのもエルサレムでした。そのように、エルサレムにいたはずの弟子たちが、きょうの聖書箇所では、彼らの出身地であるガリラヤにいる。これはなぜなのか？

しかも、このヨハネによる福音書の20章21節に書かれています。死からよみがえられて最初に弟子たちに姿をお見せになった時に、弟子たちにこうおっしゃいました。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。この言葉は、イエスさまが弟子たちを、神の国の福音を宣べ伝えさせるために世の中に派遣するということです。そのように、弟子たちはイエスさまによって使命を与えられたのに、また故郷のガリラヤに戻ってしまっている。これはどうしたことでしょうか、と思います。

おそらく、これはヨハネによる福音書には書かれていないんですが、マタイによる福音書の28章10節で、復活されたイエスさまが、復活された墓場でこうおっしゃって

いるんですね。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」そして、そのあとのほうで弟子たちがガリラヤのイエスさまが指示しておかれた山に登ったことが書かれています。……それで、弟子たちはエルサレムからガリラヤに戻ったのだと推測できます。

そうして出身地であるガリラヤに戻ったけれども、イエスさまがお出でになると約束された日時がまだ来ていない。それでと、今日のヨハネによる福音書の21章につながるのだと考えられます。

ティベリアス湖畔にて

今日の箇所では、まず弟子たちがティベリアス湖に舟でこぎ出して漁をしたということが書かれています。なぜ漁に出かけたのか？ それは、彼ら弟子たちのうち、少なくとも4人は漁師であったからでしょう。今日の箇所では合計7人の弟子が漁に出ていますが、少なくともそのうちの4人は漁師であった。それでいっしょに漁に出たのだと思います。漁師だから漁に出た。それは生活の場に戻ったということです。とりあえず生きていかなくはなりません。それには働かなければなりません。そこで漁に出たということです。

あの日のできごと

彼らは夜通し漁をしましたが、どういうわけか魚が何も捕れなかった。そうして夜が明けた。するとその岸边に立つ人が現れる。そして舟に乗っている弟子たちに向かって声をかけられる。といっても、岸边から200ペキス離れていたと書かれていますから、だいたい90メートル離れていた。そうすると、かなり大声で言葉をかけられたこととなります。「子たちよ、何か食べるものがあるか？」……「子たちよ」というのは、目上の人が呼びかける言い方です。誰だか分からないけれども、そのように岸から呼ぶ人がいた。それで弟子たちは「何もありません」と答えた。そうするとその声の主はさらに、「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れるはずだ」と叫ぶ。この弟子たちのうちの多くは漁師ですから、そのような声を聞いて、「そんなことってあるのかなあ？」と思ったでしょうが、とにかく声に従って網を今度は舟の右側におろしてみた。すると大量の魚が捕れた。驚きです。……

とここまで読んで、「待てよ、前にもこのようなことがあったな？」と思われた方は、聖書を読んでおられる方です。そうです！前にも似たようなできごとがありました。それはルカによる福音書の5章1節～12節の所です。あのときは、まだ彼らがイエスさまの弟子となる前だった。あの時も一晩中漁をしたけれども、何も捕れなかった。しかしイエスさまの言葉に従って、イエスさまを乗せて、もう一度舟をこぎ出した。そうして網を下ろしたところ、大漁となった。それでシモン・ペトロたちはイエスさまに神の姿を見て、恐れ、ひれ伏しました。するとイエスさまは、「恐れることはない。今からのち、あなたは人間をとる漁師となる」と声をかけられた。そして彼らはすべてを捨ててイエスさまに従って行った。……あのできごとです。

きょうの聖書箇所では、イエスさまは岸边から声をかけられています。現在、ガリラヤ湖のほとりに、「ペトロの召命教会」という教会が建っています。その建物の中に岩があります。その岩の上に立って、イエスさまは弟子たちの乗っている舟に向かって

声をかけられたということになっています。そしてその教会の説明によると、最初、イエスさまがペトロとアンデレ兄弟を弟子となるように招かれたのが、その同じ場所だということです。まあ、このことは本当かどうかは分からないんですが。

いずれにしても、弟子たちは、何も捕れなかった夜が終わったが、イエスさまの指示通りに網を下ろすと大漁となった。そのことを思い出したのでしょうか。それはまた、あの日あの時あの場所で、たしかにイエスさまから受けた召命を、はっきりと呼び覚ますことになったに違いありません。

「イエスの愛しておられたあの弟子が」と書かれていますが（それはこの福音書を書いたヨハネだと言われていますが）、あれは「主だ」とペトロに言った。約90メートル先の岸辺から呼びかける人が、イエスさまであると気がついたんです。それでペトロは、裸当然だったので急いで上着をまとって湖に飛びこみ、岸に向かって泳いでいった。ペトロらしいと言えばペトロらしいですね。そもそも、湖を泳ぐんなら、裸のまま泳いだ方が泳ぎやすいに決まっているのに、上着を着てから飛びこむなんて……と思いますが、裸であるあいさつは、挨拶とは認められないというマナーがありましたので、ましてやイエスさまにあいさつをするのに裸で行くのは失礼に当たる、と考えたんでしょうね。こういうところは、なんともリアルです。

153匹の魚

泳いでいったペトロが岸に上がると、そこには炭火がおこしてあり、魚が焼かれパンもあったと書かれています。

イエスさまがパンを用意し、魚を焼いておられた。この「魚」という言葉ですが、ここではパンといっしょに食べるつけ合わせを意味する言葉が使われています。ガリラヤの人は、パンのつけ合わせとしてふつう魚を食べたんです。すると、「イエスさまはその魚を、どこから調達したんだろう？ 釣りでもしておられたのかな？」……などと余計なことを私は想像してしまうんですが、そのように思いをめぐらす私自身、すでにこの復活のイエスさまと弟子たちの出来事に、引きずり込まれているわけです。

ペトロらがとった大漁の魚を数えてみると、153匹の大きな魚で一杯だったと書かれています。この153匹という数字ですが、昔から何か隠された特別な意味があるのではないかということで、さまざまなが考えられてきました。それはそれで興味深いことには違いないんですが、そのようなさまざまな学説をご紹介していると、きりがありませんから、ここは文字通り153匹であったと読むべきだと思います。それは小魚ではなく、大きな魚でした。商店を営んでいる方が、毎日の売り上げを間違いなく勘定するように、彼ら漁師は、魚を数えたんです。

もう少し言うならば、イエスさまの言葉に従って網を下ろしたところ魚が捕れた。その魚を数えるということは、主の恵みを数えることでもあります。153匹あった。これもまたリアルなことに違いありません。「あの日あの時あの場所」の鮮明な記憶です。

朝の食事

イエスさまは「さあ、来て、朝の食事をしなさい」とおっしゃいました。イエスさまが給仕をなさいます。一晩中働いて疲れただろうと、そんな雰囲気伝わってくるかの

ようです。朝ご飯。それは一日を生きる最初の食事です。ですから、これを食べて生きよ、と言われていたようにも感じます。……「今日という一日を生きようじゃないかと、なぜならわたしは復活してこのように生きているんだから、わたしと一緒に生きようじゃないか」……無言のうちに、そのようにおっしゃっているように私には感じられます。

さて、今日登場したのは、死んだけれどもよみがえられたイエスさまです。そしてこの体のまま、天の父なる神の所に昇って行かれることとなります。すなわち、このイエスさまの体は復活の体であり、コリントの信徒への手紙15章43～44節に書かれているところの、霊の体であるに違いありません。すなわち、それはもう朽ちることの無い体、死なない体なんです。

そうすると、もう食べる必要はないのではないかと。しかしこのときイエスさまも弟子たちと共に朝食を食べられたと思われまふ。そのことは、ルカによる福音書に書かれている復活されたイエスさまがなさったことを読んで明らかなです。朽ちることのない体であるから、食べる必要もないように私たちには思われる。しかしこのときイエスさまが弟子たちに朝食を用意され、いっしょに食卓に着かれたということは、共に食卓に着くということが、単に生きるために食べるというだけではないことを示しています。

「同じ釜の飯を食う」という言葉があります。私は、遠い昔の若かりし学生時代を思い出します。私は学生寮で生活をしました。食事もいっしょに食べました。その同じ釜の飯を食った人たちは、今では同じように年を取っているわけですから何十年も経っているわけですが、今でも先輩後輩であり、友であり、職業も、生活の場も、考え方も、思想も違っていても、なにかこう家族のように思い出されるんです。

それは全く一つの例に過ぎませんが、主と共に食卓に着くということには、何か生きるために仕方なく食べるということ以上のものがあるということが出来ます。私たちが聖餐の食卓に着くということもそうです。天の国の食卓を予言しているということも、聖餐式の食卓の恵みの一つです。

主はよみがえられた

12節の後半で、「弟子たちは誰も、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」と書かれています。が、「そりゃ復活のイエスさまを目の前にしているんだから、見りゃ分かるに決まっているだろ」などと思うでしょう。しかしここでこのような書き方を、聖書があえてしているのは、十字架で私たちの罪を引き受けて死なれたイエスさまが、信じられないことには、よみがえられたことは確かだ。確か確かだ、と、強調しても仕切れないほどの思いを込めて書いているのだと思います。

「さあ、来て、朝の食事をしなさい。」……イエスさまは確かによみがえられた。復活は確かなんだ、私たちが救われたのも確かなんだ、わたしはそれを見た、体験したと、聖書は語りかけています。そして今も主は生きておられ、聖霊によって共に歩いていってください。天の国＝神の国の食卓を目指して、その確かな希望の世界へ向かって歩いていこうと、主は語りかけておられます。